

## 終末段階を迎えるウクライナ戦争

### 〜ロシア軍の勝利とその衝撃〜

一般財団法人 日本安全保障フォーラム会長  
岐阜女子大学特別客員教授・博士（安全保障） 矢野義昭

ウクライナ戦争は最終局面を迎えつつある。ロシア軍（以下露軍）総兵力約75万人に対し、ウクライナ軍（以下宇軍）は20個旅団基幹、約6万人で今年6月初旬から攻勢を開始したが失敗し、露軍の攻勢が本格化している。

#### 始まった露軍の本格攻勢と宇軍陣地帯突破

露軍は7月21日頃、東部ドンバス北部のカルマジニフカ付近で陣地帯を突破し、その後も西進を続けている。この正面では宇軍の陣地線はオスコル川東岸沿いまで構築されていない。西進した露軍は、ハリコフ州のオスコル川渡河点を制し、バフム



宇軍の露軍陣地を突破しようとする試みは「すべて失敗した」

ト市街南北で露軍と激戦を続けている。宇軍攻勢部隊主力の背後に回り、同部隊を包囲する態勢をとる可能性が高い。そうなれば、東部ドンバス全域が露軍に占領されることになるであろう。

オスコル川を渡河した露軍は、ハリコフ（ハリキウ）方向に進撃を続け、同市を包囲するかもしれない。その際には、現在ハリコフ北部の口

シア領内に集結している部隊と、ベラルーシに集結し攻撃準備中のワグネルを含む約10万人強の兵力が連携し、ハリコフを北方と西方からも包囲攻撃することになるであろう。

南部のザポリージャ正面とバフムト正面以南のドンバス地域では、堅固な露軍陣地帯と火力に阻まれ、宇軍は攻撃前進できず、露軍の逆襲により撃退されている。プーチン大統領は、7月20日過ぎ、宇軍の露軍陣地を突破しようとする試みは「すべて失敗した」と表明している。

#### 予備隊が枯渇している

##### 宇軍の攻勢戦力

宇軍は約10年をかけてNATO諸

国で延べ30〜35万人の将兵を訓練してきた。その精鋭の正規軍部隊主力は昨年2月の開戦後、5月頃までに大半が死傷してしまった。昨年9月からの攻勢では、予備隊の中でも訓練された予備役を主に投入したが、ハリコフ州の大半とケルソン州の一部を奪還したものの、露軍の火力消耗戦により昨年12月までに大半が死傷した。

宇軍の戦死者数については、昨年12月時点では約10万人とみられていた。しかし、今年に入り宇軍は、予備役の中でも40歳以上の老兵や徴兵年齢に達しない少年兵を主に、訓練も不十分のまま、無理な攻勢を南部やバフムト正面で繰り返した。

その結果、今年6月には戦死者数は30〜35万人に急増した。今年6月初め、宇軍は17個旅団基幹、約6.3万人の兵力で攻勢を開始したが、その後の1カ月間で、兵員と装備の約30%を損失したとみられている。

現在の宇軍の戦死者数は約35万人、戦傷者・行方不明者を併せた損

耗は70〜80万人に達しているとの見積もられている。宇軍の正規軍と予備役を併せた人的戦力は、攻勢戦力の残存部隊約5万人を残し、ほぼ壊滅状態になっている。またNATOからの契約兵等最大8万人もかなりの損害を出し、米軍にも約1100名の戦死者が出ている模様である。

### 高まる宇軍指導部への不満と 宇軍崩壊の兆候

このような人命の犠牲を顧みない攻勢一点張りの戦争指導に対し、将兵の間では不満が鬱積し、ゼレンスキー大統領への非難も高まっている。また、戦場で負傷しても救護も後送もできず、むごむご死なせるのに忍びないとして、露軍に投降し救援を求める例も出ている。戦場で両軍がロシア語で直接交信し、宇軍が数十名の小隊、百数十名の中隊ごと、投降する例も増加している。露軍は捕虜を厚遇しており、投降者への休養や救護の手当でも整っていることは、宇軍の将兵の間でも知られていると、米軍関係者も述べている。バフムト正面等で敢闘している宇

軍部隊が、包囲され投降すれば、宇軍には後方の陣地線に配備し防御を立て直す予備戦力はほとんど残されていない。そうなれば、ドニエプルの抵抗線も突破され、露軍によるハリコフ、オデッサの奪取、さらに西部ウクライナ占領まで急速に戦況が進展する可能性もある。

またベラルーシに集結中の約10万人強の部隊が南進し、ポーランド・ルーマニア国境を閉鎖する可能性がある。そうなれば、宇軍はNATOからの兵員・武器・弾薬の支援を完全に断たれ、数週間で戦争は継続できなくなるであろう。

### 枯渇しているNATOの 弾薬と装備

米軍始めNATOの弾薬と装備も枯渇しかけており、長くてもあと3ヵ月しか持たないとみられている。10月中旬までには弾薬・ミサイルの備蓄は枯渇することになり、宇軍はそれ以上の戦闘継続はできなくなる。

装備についても、増産体制をとるには、砲弾などで数ヵ月、HIMM

RSのような最新装備では数年を要する。露軍は昨年1200万発、1日当たり平均3万発を射撃したが、今年に入っても、1日1.2万〜3.8万発を射撃している。これに対し、宇軍は最大でも1日6000発程度しか射撃できない。

この圧倒的な火力の優越と偵察衛星・無人機・偵察兵などから得たりアルタイムの目標情報をリンクさせ、GPSなどの精密誘導による砲撃を数十キロ先から数分以内に加えるという遠距離精密誘導火力による打撃が宇軍の損耗の約75%を招いている。この様相は今も基本的に変化はなく、宇軍が一方的に人員と装備を失い、10倍近い戦死者比率を招く結果となっている。

クラスター爆弾の使用は、露軍も対抗して報復使用するおそれがあり、子弾の散布位置が特定できず処理が困難で、自軍や民間人の被害も招くことから、逆効果になるであろう。

オランダによる24機のF-16供与も訓練が8月から始まり半年はかかると言われており、秋には間に合わない。

結局、宇軍は今秋には弾薬・ミサイルが底を尽き、装備も大半が破壊されることになるであろう。

### 停戦交渉の時機到来と 日本の立場

このように、兵員でも武器・弾薬でも宇軍戦力が枯渇するという局面が、今秋に迫っている。

ウクライナは戦争を続けても領土を奪われ将兵を無駄死にさせる結果になるであろう。1日も早く停戦交渉を進めるべきときに来ている。日本政府は、戦争継続政策への追従を止め、停戦交渉の橋渡しをすべきであろう。

また北東アジアに有事があっても、当面の間、米軍は兵員の派遣はもちろん、武器・弾薬すら支援できない状況が続くとみられる。その隙を突いて、中朝が朝鮮半島、尖閣、台湾で軍事的挑発や侵略を試みるおそれがある。それに備え、日本自らが装備・弾薬の増産・備蓄、予備自衛官の増員、シエルトターの整備など、自力で戦える態勢を早急に固めなければならぬ。